

## 序章 1 研究目的と研究方法

社会的要因が人間の健康や疾病に絡んでくる度合や範囲は、その原因や対策のいずれにおいても、ますます強まり拡大しつつあるといえる。

ところでスモンの調査研究に関しては、その発生原因にからむ社会的要因の究明は、疫学などから一部なされてきているとはいえまだ不十分であり、さらには対策をすすめる前提としての、患者がおかれている実態や直面している問題などについては、これまでほとんど取りあげられてこなかったといつてよい。

そこで保健社会学からの取り組みの最初として、まず今年度は、「スモン患者の生活実態およびその意見」についての調査を行なうこととした。

主な調査項目は、①現在の病状およびこれまでの病気の経過、②これまでの医療機関とのかかわりと支払った医療費、③発病による仕事や生活条件の変化、④患者のいだいている悩み、不満、要望、⑤感染説やキノホルム説についての受けとり方、等々である。

調査対象者として選定したのは、埼玉県戸田・蕨・川口地区と岡山県井原地区に居住する患者のうち、厚生省およびスモン調査研究協議会で実施したスモン調査個人票で、「確実にスモンである」とされたものの全員121名（埼玉30名、岡山91名）であり、これらは研究分担者が直接面接して調査を実施した。なお、他地区へ転出等の理由のため、実際に調査が可能であったのは、埼玉が30名中29名、岡山が91名中78名の計107名であった。

現地調査が実施されたのは、昭和46年1～2月の期間である。

なお今日の調査では、調査票を用いて主として統計的処理を意図した方式と、対象者1人1人の実態を「訪問時の状況」「現症」「病歴（治療歴）」「家庭および社会生活」「患者としての意識・意見」等を柱にしてケースレポート形式でまとめるという方式を並行して行なったが、今日の報告書は、調査票による調査を中心として、それにケース分析を加えてとりまとめたものである。

これらのうち、今日の調査で使用した調査票と、そこから得られた単純集計の結果を、この報告書の末尾に添付しておいた。

## 2 調査対象地域の概要

なお、本文に入るまえに、今日の調査対象地域となった、埼玉県戸田・蕨・川口地区と岡山県井原地区の概要をみておくと以下のようなものである。

### 埼玉県戸田・蕨・川口地区

戸田・蕨・川口三市は、埼玉県の南部、東京都に隣接する所に位置している。西から南にかけては荒川が流れ、旧来、戸田・蕨は旧中仙道の川渡しの要所として、また川口は“鑄物の町”県下最大の工業都市として発展してきた。人口の都市集中現象の中で、東京の都心部への所用時間約30分というところにあるこの地域の位置からして、三市の人口は急激に上昇し、農地から宅地への転用という事態に至る所にみられている。

戸田 (人口)	27,917 (昭35)	→	62,045 (昭44)
(世帯数)	6,258	→	20,517
蕨 "	48,098 (昭35)	→	76,264 (昭45)
"	12,540	→	25,839
川口 "	272,771 (昭42)	→	305,887 (昭45)
"	77,667	→	85,543

三市の面積、人口密度(1km<sup>2</sup>, 44年度)は、

戸田	18.0 km <sup>2</sup>	3,447
蕨	5.1 "	14,691
川口	55.7 "	5,287

となっており、殊に蕨市は“日本一ミで人口過密の市”という呼び名さえある。

人口増加は、人口構成の中で、20・30代の若年層の優位にもとづく、自然増加に加え、それらの農村からの流入という社会増加が併せみられることに起因するものである。

また、1日の流出入人口をみると、

\* 蕨市、昭40年10月1日調査

$$\begin{array}{rcccc}
 \text{(夜間人口)} & - & \text{(流出人口)} & + & \text{(流入人口)} & = & \text{(昼間人口)} \\
 66,000 & & 24,000 & & 8,300 & & 50,300
 \end{array}$$

<うち東京17,200>

という状況で、近郊ベッドタウンの色彩が戸田・蕨地区では極めて強く伺われる。川口は、鑄物工場を中心とする中小企業が多数(昭44年の事業所数は3,404、従業者数は59,705(人)、出荷額は28,527,832(万円)で、9人以下の小企業で働いているものの比率は60%近くにも達している)存在するため、他の二市とは若干性格を異にしている。

三市の医療施設の状況は下記のようになっている。

	病 院	診 療 所	歯 科
戸 田	5	2 3	1 1
葦	5	3 3	1 9
川 口	2 3	1 3 2	7 0

特にスモンに関しては、昭和39年、東京オリンピックの年、この地域に多発し、またポート会場であったこともあわせ、マスコミが、「戸田の奇病」としてとりあげ、注目を集めた地域である。

### 岡山県井原地区

井原市は岡山県の西南に位し、南は同県笠岡市、西は広島県神辺町に接する小都市である。周囲を小高い丘陵に囲まれた盆地で、市の中央を高梁川の支流小田川が西から東に貫流し、その流域に平野がひらけ市街地が連なっている。古来東西交通の要路であった山陽道が通じているところで、現在も北部山間地と、福山市、笠岡市、倉敷市を結ぶ交通の要衝である。昭和28年近隣10カ町村が合併し市制がひかれ、現在総面積89.5Km<sup>2</sup>、人口37,816人、世帯数9,276(昭45年国調概数)である。

この一帯は旧道沿いに古くから先染織物の街として栄え、繊維産業が児島と並んで発達している。人口ピラミッドも15～19才の年齢層が著しく多い特異な形を示しており、産業別就業人口では昭和40年の構成比が製造業41%、農業31%で、35年と較べ1,2位が入れ替っている。昭和40年「備後工業整備特別地域」に編入され、近年益々工業都市としての性格を強くしている。

交通機関は、国鉄山陽本線と笠岡で結ぶ私鉄の井笠電鉄が46年で廃止されるなど、専ら自動車運送に頼っているが、昭和41年5月から福山と総社を結ぶ国鉄井原線が着工され、早期開通が待たれている。

保健医療関係で注目されるのは、毎年赤痢の集団発生があることで、特に39年度は患者数が140人に及び、スモンの多発と相俟って市当局は環境衛生の改善に力を入れ、上水道が43年によりやく給水を開始している。市内の医療施設は、45年4月現在病院3、診療所22、歯科診療所11、助産所23、薬局10となっている。このうち市民病院は唯一の公立病院として昭和38年5月開院し、45年1月現在病床数180床、職員数86名で、内科・外科等6診療科を有している。